

日本の「風景」にデンマークの「風」を重ねると

— デンマーク視察研修で考えたこと —

レポート：中谷 稔

★「森のようちえん」との出会い

なぜ、自分はこの「デンマーク視察研修」に参加したのか。一番の「はじまり」を見つめなおす所から、感想を書き始めたいと思います。

私はデンマークというよりも、「森のようちえん」のルーツを辿り、本場の様子を自分の目や耳、肌で感じたいと思ったことが、最初のきっかけです。

その、「森のようちえん」には、仕事のストレスや母の介護疲れによる精神疾患から回復しかけているときに初めて出会いました。(神奈川県で行われた全国フォーラム) 1年半休養する中で、今までの自分の生き方や仕事の仕方について振り返る時間を持ち、「この先、本当にこのままでいいのだろうか？」と何度も何度も自問自答を繰り返しました。そんな中、病状が回復していくきっかけになったこと(家庭菜園での野菜作り・歩くこと・猫との触れあいなど)のほとんどが、自分の子ども時代(0才~12才)に体験、経験したことの中にあることに気がつきました。

★とことん遊んだ子ども時代

私が生まれた1960年は、高度経済成長の真っただ中でしたが、地方の田舎である島田市は舗装されていない道路が多く、自動車の往来を気にすることなく放課後は家の前でたくさん遊びました。もちろん、家の裏の田んぼ、空地、近くの川(大井川)など、思い切り体を動かして遊ぶには十分なほど、自然環境に恵まれていました。



<いつでも笑顔満開>

大井川に架かる橋桁を使って造った「秘密基地」、川の本流を渡る「冒険」の中で死を感じたことなど、一生忘れることのない記憶が子ども時代に刻まれました。

そんな、時間を気にせずとことん遊ぶ子ども時代が、もし、なかったらここまで回復することはあり得なかったと感じています。

★今のままでいいのか？

回復後、元の職場に復職したわけですが、久しぶりに見た学校生活を過ごす子どもたちの姿に、えも言われぬ「違和感」を感じました。

生きることを急かされている「子ども」、窮屈そうにしている「子ども」、自分を素直に表現できず妙にトゲトゲ・イライラしている「子ども」などなど・・・。

やっぱり、このままではいけないと考え思

い切って早期退職し、プレイパークのボランティアをする中で、再び「森のようちえん全国フォーラム in 諫早」に参加しました。そこで、デンマークの保育・教育&福祉、国づくりやそれを支える「民主主義」について、熱く語る中能さんに出会いました。

★ご縁に導かれるままに

そして、4月から福祉を学んでいる中で、その時聞いた中能さんの「三本の木の話」が甦りました。じっくり考えてから決めるというより、「今しかない、今だ!!」という思いに駆られ、今回の「デンマーク視察」研修を決めました。とにかく、その場に行って「生」で、感じるままにデンマークを知りたいと思いました。

これが私の「デンマーク視察研修」の最初の一步です。

★子どもが子どもらしく居られるところ

今思い出しても、あの時の森の様子が甦ってきます。バスから降りた子どもたちは、急かされることなく自分の速さで歩き、時には止まりながらいつもの場所に向かっていきました。

そんな、子どもたちと歩きながら森の音とにおいを感じる事ができ、私にとっても心地良い時間になりました。

子どもそれぞれが好きなように遊ぶ姿は、とても自然でした。指示したり禁止したりする、大人の大きな声が聞こえることのない環境の中で、小さな危険を承知の上で子どもたちは実に楽しそうでした。

小さな本物の斧を使い必死になってロープを切ろうとする女の子、焚火をじっと見ながら座っている男の子、友だちと力を合わせ大きな丸太の下の虫をとろうとする子など、さまざまな遊びを自分で見つけ夢中で遊ぶ姿がとても印象に残りました。

森の音やにおい、焚火のにおいや暖かい色を感じるなど、自然に包まれながら生活することで、常に五感に心地よい刺激を受けることが、この子どもたちの育ちを支えているのだと感じました。それが何よりも、子ども時代に一番必要だということを大人がわかっているから、「森のようちえん」の考え方は続いていくのだと思いました。

★老いても、障がいをもっていてもその人らしく暮らしていけるところ

ソルバングの1グループ棟で出会った男性。私と同じ年だったので、親近感を抱きながらその人のことについていくつか質問をさせてもらいました。(夏代さんの通訳のもと)

生まれたときからの精神疾患で、国民学校は出ているが仕事やご結婚はしていないとのことでした。今、幸せかどうか尋ねることはできませんでしたが、部屋の中に置かれた若いころの写真や好きな音楽CD、小物を見ていると、心地良いと感じる環境の中で毎日暮らしているのだらうと感じました。

自分が心地良いと感じる生活を選べる自由と、選択肢や機会(環境)が整備されているところに、福祉国家としてのデンマークの理念が表れているのだと思いました。

それは、ロスキレ市補助器具センターでも感じました。いくつかの手押し歩行器を紹介してくださった中で、両手でブレーキをかうタイプと片手でかうタイプがあることを知りました。私の母は両手タイプの歩行器を使い生活していたので、片手でブレーキをかうタイプはデンマークで初めて見ました。

(きっと日本にもあると思います)

たとえ片手しか使えなくなってしまうても、残されたその力で歩きたいと望む人の生活を、最大限叶えようとするところにデンマークの福祉(ふだんのくらしをしあわせに)

の歴史を感じました。

★デンマークの「風」を重ねて見えてきたこと

デンマーク研修からもうすぐ1ヶ月が経とうとしています。大学では後期の授業が始まり、私もいつもの生活リズムに戻り、毎日をつつがなく過ごしています。

だいぶ秋らしくなり、風に漂い流れてくるキンモクセイの香りを楽しみながら、ベランダからいつもの風景をボーッと見えています。

たぶん、見えているこの「風景」は大きな自然災害や事故がない限り、向こう50年は変わらないだろうし、変わらないでいて欲しいと思います。

しかし、このごろ新聞、TVで大きく取り扱われている「過労死」や「過労自殺」については、胸が締めつけられ、信じられない思いが募るばかりです。これこそ、今すぐ変えなければならないことだと思います。

ロスキレ市の街の中一人で歩いているとき、私は2つの光景に出会いました。

ひとつは商店街で健常者と電動車イスの方が、立ち止まりおしゃべりをしているところ。もうひとつは、土曜日の午前中、乳母車を押しながら散歩するお父さんの姿です。

両方とも、とても自然に感じました。たぶ

ん普段の生活の中に、そうすることが当たり前になっており、普段からそれが行われているから「自然」に見えたのだと思います。

夏代さんや中能さんが、何度も重ねて話されていた言葉「デンマークの子どもは、誕生日祝いに『民主主義』をもらう。」の言葉の意味と重みを、今強く感じています。

もらった『民主主義』を、ひとりの赤ちゃんを支える周りの大人たちが大事に育て、老いたり障がいをもったりしたとしても、人生の最期を迎えるときまで、その人の自己選択・自己決定を尊重するという、国づくりの精神（哲学・理念）が根底にあることを、身をもって感じた今回の研修視察でした。

最後に、夏代さんの著書に何度も書かれていた「子どもは神様の贈り物、年寄りや芸術の賜物」の意味が少しずつわかってきたように思います。「人が資源」の福祉社会をめざしているデンマークについて、もっともっと知りたいと思う気持ちが強くなりました。

2回目のデンマーク視察研修が叶えられるよう、また、明日からの日々の生活を穏やかに過ごしていきたいと思います

